

あちらこちら文学散歩（第四回）

井本元義

「十一」ヴェルレーヌとの出会い

ヴェルレーヌとランボーの愛憎に満ちた葛藤は、少しでも文学に触れた者ならだれでも知っている。またおそらく映画になったのはフランスでは十本を下らないのではないか。僕はデカプリオがランボーを演じた「太陽と月に背いて」だったか、その一本しか知らない。デカプリオが僕のランボーのイメージと違ったので、面白くないという印象しか残っていない。フランスでのほかのフィルムを探したが、手に入らない。古く比較的評判のいい「ファランジ」だったか、正確には分からないが、日仏学館へ尋ねたが物はなかった。いつかチャンスがあればと待っている。

千八百七十一年九月、パリコムニオン崩壊のあと三か月余りシャルビルで悶々として過ごしていたランボーが意を決してパリにやってくる。それはもう家出ではない。

その日の午後遅く、当時のストラスブール駅、現在の東駅

で、電報を受け取ったヴェルレーヌはランボーの到着を待っていた。次々に降りてくる客の中には見当たらない。あのすばらしい「酔いどれ船」を書いた詩人だ。三十歳くらいか、大柄な紳士で相当のインテリであるだろう。二、三人声をかけたが違う。

徒歩で四、五十分の自宅へがっかりしてとぼとぼと帰ると、応接間に新婚の妻とその母親が一人の少年と向き合っており、気づい感じて座っている。もじやもじやの髪と擦り切れた服、不遜な態度の赤ら顔であるが、美少年だ。それがアルチュール・ランボーだった。

モンマルトルのサクレ・クール寺院の右手を少し裏に回ると、短いユトリ口通りがある。その途中の小さな幅の石段を降りる。やや長い。両側には古い小さな家がぎっしり並んでいる。苔むした小さな庭もある。古いパリを味わうには風情がある。昔は裕福な家だったのか、貧しい所帯だったのかわからない。今は家が古くてもこの雰囲気は結構価値があるだろう。階段を降り切った後ろを見あげると、ユトリ口の絵にあるコタン小路そのままである。

サクレ・クール寺院は仏独戦争の敗北のあと、パリコムニオンの崩壊のあと、意気消沈したパリ市民を元気づけるために建てられたらしい。すると当時は寺院はまだなく、それはパリ郊外の田舎の住宅と言ったところだろうか。石段を下りて左に曲がり、次の角をまた左に曲がるとそこが短いニコレ通りである。あまり風情はない。途中に白い小さな三階建

ての家がある。実際には三階には見えない。鉄格子の門の奥に、二、三軒の家がある。格子をよじ登って中を見る。確かに人が住んでいるようだ。ランボーが好き人にはこの家の前に立つのは感激の極みだろう。二人の初めての出会い。

家の前にはパリのあちこちで見かける案内板が立っている。歴史の説明の後、ここからヴェルレーヌの天国と地獄が始まった、と書いてある。百四十年前この小さな家の中で起こったことを想像すると嬉しくて仕方がない。中を見たいがそれが出来ないのが残念である。



詩人たち

左端 ヴェルレーヌ

横 ランボー

ヴェルレーヌは当時は市役所の役人で、真面目な青年であった。新進気鋭の詩人としても売出し中だった。その家は新

妻の実家で、彼女マチルダは十六歳、妊娠していた。しかしヴェルレーヌの関心はランボーに移る。

意気投合した二人はカフェからカフェへと飲んだくれたり芝居を見たり、詩を書き語りあい自由な楽しい日々を送るようになる。不遜無頼、行儀の悪いランボーは当然その家を追い出される。彼はヴェルレーヌの友人の家に居候になったり、すぐに追い出され、またいつかのようにごみ箱を漁ったり浮浪者の生活をする。慣れたものだ。またあの真面目なヴェルレーヌが酔っぱらってうるさい妻を殴ったりする。生まれたばかりの息子を投げつけたりする。



詩人たちの宴会

そしてランボーはパリの詩壇にデビューする。

戦争で中止されていた高踏派の食事会が再度再開されたころだった。食事の後の朗読会で、ヴェルレーヌがランボーを紹介する。やおら立ち上がったランボーが「酔いどれ船」を朗読する。詩人たちは感嘆し驚愕し茫然となつて身動きが出来なかつたらしい。一人の詩人が友人にあててこう記してい

る。

「あなたはあの夕食会に出席されず実に残念でした。そこでアルチュール・ランボーという十八歳にもならない恐るべき詩人が、彼の発見者であるヴェルレーヌに紹介されたのです。大きな手、大きな足、まったく子供っぽい、十三の子供にもふさわしい容貌、深いブルーの眼、内気というより人を寄せ付けない性格、こうした若者ですが、その青年の途方もない力強さと聞いたこともない退魔性に満ちた想像力は、われわれを魅了し、というよりぞつとさせた・・・」

最初はその才能を認められ大切にされるが、すぐその傲慢な態度で嫌われ始める。詩の会合ではアプサンを飲みながら隅から真面目な詩人の朗読を邪魔して大声でからかったりする。有名な十七歳の彼の唯一と言つていいほどの真面目な写真撮つてくれたカルジャという写真家を仕込み杖で切りつけたりする。あれほど恭しく手紙を書いて詩を送つていた大御所のテオドール・バンビルが、彼の詩にちよつと意見を言ううと、いきなり彼を軽蔑し始める。彼に向つて、そろそろ時代は十二音節がすたるのを迎えるのではないか、と訊ね、出ていく時は、間抜けなじじいだ、とつぶやく。ヴィクトール・ユーゴーやマラルメにも会うが、ただ二人はランボーを元氣な若者として好意的に遠くから見ている。

ランボーは脱皮しようとしていた。今までと違つた詩を模索する。伝統の形を壊し、すなわち十二音節を壊し、韻を捨

て、これ見よがしに次々と書く。ボードレル風散文詩にも挑戦する。しかし言葉はますます現象の色合いを増し力強く、怒りにも似た激しい侮蔑で周りを翻弄する。

心優しいヴェルレーヌにとつてはまさに天国と地獄である。ランボーと酒を飲み詩を語り詩を書き日々を送ることはこれ以上嬉しいことはなかった。家出同然の生活をしながら彼の詩は音節も韻もいつも美しく哀調を帯びている。ランボーとパリやブリュッセルの街を徘徊しながら、しかし妻への愛情にもすがりつきたい。妻とその母につかまり連れ戻されそうになると大人しく従うが、すぐに逃げ出す。彼の家庭は完全に破壊された。彼もまたランボーに似てナイフを振り回したりするようになる。たまにランボーに会うと喧嘩して傷つけられたりする。その繰り返しである。悩み多きヴェルレーヌでもある。

「十二」パリの放浪

ランボーには金はない。住居もない。しかし彼は相変わらず不遜である。年上のヴェルレーヌにも、おい、ポールと呼び捨てである。周りがカンパして生活費や住まいを提供してくれても当たり前という顔をしている。それでも大抵は一週間とか短い滞在だ。やりたい放題の生活だが、彼にとつては実に充実した日々ではなかつたらうか。事実彼の詩は古さを捨てて大きく変貌している。その彼の住まいを尋ね、その

彼と同じ空気を吸い、彼が詩を書いている後姿を見、幻の彼と言葉を交わすのは僕にとってこれ以上の欲びはない。

パリの下町サン・ミッシェルからサン・ジェルマン・デブレへ抜ける路地にサン・タンドレ・デザールがある。両側にレストラン、カフェ、お土産屋、本屋、服屋、クレープ屋、デイスコ、美容室などが並んでいる。僕はこの通りが好きで時間がある時は何度も往復したものだ。そこで偶然にテオドル・バンピルの住まいも見つけたこともある。死んだのが千八百九十一年とプレートがある。この大御所はランボ

ーが死んだ同じ年に死んだのだ。
またその路地から脇の路地に入るとかなり古い、二、三百年は経っているような建物にも出会う。オートフイユ通りを見つれる。昔は柳の並木の通りだったらしい。その何番地かでボードレールが生まれた。通りは薄暗くて臭い。奇妙な建物が立っている。



ビッシン辻
10番地
ランボー住む

元の道を進むとビッシンの辻「四つ角」に出る。大昔は処刑場だったとか何かで読んだ気がするが正確かどうか忘れた。右手にはホテル、サン・タンドレ・がある。数日泊まったことがある古いホテルでベッドはギシギシ鳴った。向かいに名前を忘れたがメキシコ料理屋があつて、サンドラというパリジェンヌの親父の経営の店で、行くと喜んで歓迎してくれた。サンドラは宮崎県庁に友好親善で来ていた。僕は仕事で宮崎へ行くたびに何人かでフランス語を習ったりしていた。その店で遅くまで飲んで閉める時に椅子の片づけを手伝ったら、ギャルソンから、オーアミーゴ、と声を掛けられたりした。

辻の手前の古い石畳の路地を左に曲がると、有名なル・プロコープというレストランがある。正面に回ると入り口にナポレオンの帽子が展示されている。ここは十七世紀のフランスで一番古い文学カフェということらしい。一度入ったが、自分で支払いはしなかった。高そうだった。

辻を右に曲がつて進むとセーヌ川だ。途中に今はない「タブー」というキャバレーがあつた。カミュやボリス・ピアンなどが夜な夜な飲んでいたらしい。探したが場所は分からなかった。

左に曲がつて大通りを横切つて進むとオデオン座がある。その先はリュクサンブル公園の正面。

さてこの四つ角はパリでは最も華やかな下町の一つである。花屋、パン屋、カフェ、レストラン、デイスコで若者たちが夜遅くまで喋ったり飲んだりしている。その十番地に一週間ほどランボーが住んでいた。テオドル・バンピルが持つて

いるアパルトマンの女中部屋に住むようにしてくれたのが、人のいい巨匠の奥さんだった。ところが、丸裸のランボーが窓から丸見えで近所からクレームがつく。巨匠が注意するとランボーは答える。「あちこちで寝泊まりしていたのでのみしらみで、服を脱がねばならなかったんです」心優しい巨匠は服を買ってやり食事をご馳走してくれたらしい。しかしこれも一週間で出てしまう。建物は変わってしまっているようだが、その一階はカフェだ。

ある時、その向かいのアパルトマンのワンルームに三週間ほど泊まったことがある。毎晩そのカフェでビールとワインを飲んだ。いつかランボーが通り過ぎるのに出会うはずだった。九月の気持ちのいい日々夜だった。ビールとワインが街灯に煌めき、若者たちのお喋りは尽きなかった。僕は孤独だったが、楽しかった。ただ何日通ってもカフェのギャルソンは、なんで年寄りの日本人が毎晩来て座っているか、という顔をしてサーブミスも今いちだった。

昼間ちよっとお土産屋に寄った時にある絵葉書を見つけた。芸術家たちが住んでいた建物の写真で彼らの顔も円の中にある。ランボーとその建物が写っている。すぐ買ったことは言うまでもない。そしてその夜、僕はギャルソンを呼んで下手なフランスで説明した。君はここにランボーがちよっと住んでいたと知っているか。驚いた彼の嬉しそうな顔が忘れられない。次の日から彼は僕がカフェに座ると飛んできて握手を求めようになった。ほかのサーブミスはなかったが。

五年ほど前だったか、アメリカ映画で「ミッドナイト・イン・パリ」というのがあった。金持ちの家族、両親とその娘が売れない作家志望の婚約者とパリに旅行に来る話だ。二人には亀裂が入るが、男はパリを彷徨う内にパリに取りつかれ、ある時二十世紀の初めの良き時代のパリヘタイムスリップする。ピカソ、マチス、ジョセフィン・ベーカー、ガートルード・スタイン、フィッツゼラルド、ゼニダ、ヘミングウェイ、などと会う。

主人公が初めてヘミングウェイに会うのが古い「ポリドール」というレストラン。カルチエラタン、オデオン座のそばに今もある。中は広く古い。千八百四十八年と書いてある。床柱壁テーブルすべて年期が感じられる。昼時はランチが安くてポリュームがあるので学生、若者でぎっしりになる。夜は夜で観光客で肘と肘がぶつかるくらい一杯。僕はパリ滞在中は必ず一度は行く。先日は隣の客は北欧の観光客だった。観光客によると、昔はランボーもよく来ていたと書いてある。その隣が、ムッシュ・ル・プランス通り四十一番地、ホテル・ドリアンである。ポロホテルで売れない芸術家たちのたまり場だった。その最上階の屋根裏がランボーの部屋だった。この部屋で彼は詩を書き楽しんでる。友人ドラエーにあてた手紙が残っている。

「僕の部屋はサン・ルイ高等中学校の庭に面している。僕の狭い窓の下には大きな木があった。朝の三時になるとろうそくの火が青ざめる。すると小鳥たちが一斉に梢でさえざり始

める。これでおしまい。もう仕事はしない。この何とも言いぬ明け方のひと時に心を奪われて僕は木々や空に見とれる。するともう大通りには砂利車の断続的なよくひびく優しい音がひびきはじめる。僕はパイプをくゆらせて屋根瓦に唾を吐く。五時になると僕はパンを買いに行く。労働者たちはいたるところを歩いている。僕は帰って食事をして朝の七時に床に就く。夏の早朝、ここではいつもその時分が素晴らしい。

・ ・ ・

ランボー好きな若者にはたまらないほどの魅力にあふれた文章だ。この屋根裏部屋に昇れば必ず彼に会える。ホテルは今ホテル・ステラに変わっている。入り口は狭いドアが一枚。どきどき期待しておそろおそろあける。奥行きはまあまあだが、幅の三分の一は木の階段だ。暗く古い。二階の受付の部屋には中年過ぎのおばさんが一人座っている。ボンジュール・マダム。ここは昔ホテル・ドリアンと言っていましたか。そうだが、なにか。ランボーが住んでいたということを知りました。ハア・ハア。僕の発音がわるいのは分かっている。思いっきり、強めの気障な発音で繰り返す。おばさんはニコリとして部屋を見るか、と聞いてきた。ヤッターと心が踊る。部屋は五階でおばさんは階段の途中で二度ほど休憩して息を整える。急な狭い階段でかなりきつい。

部屋は六畳もない広さで奥に窓があるが、暗くなぜか臭い部屋だ。壁には斜めに屋根の跡が残っている。おばさんの説明によれば、屋根裏部屋を改造して普通に部屋にしたので、

もともとは天井はこの屋根の下までだった。ベッドと机だけで部屋が一杯になるし、頭も低くしなければならぬ。それでも彼は生き生きとしている。唾を吐いたという窓はおそらく屋根に着いた小さな天窓に違いない。外は屋根が見えるだけ。写真を撮ろうにも狭すぎて部屋の状況をうまく写せない。仕方ないからおばさんの写真を撮る。一泊いくらか聞くと、五十ユーロという。星なしの五階にしてはやや高い。それでも遠慮するおばさんに十ユーロをお礼にあげる。今度パリに來たら泊まるからよろしく。この間、約三十分ほどだが、興奮と緊張で印象だけが残り詳細は覚えていない。ドアを閉める時最後に中を見ると、懐かしい誰かが、僕に微笑んで別れを告げたようだった。

二千十五年、フランス政府観光局主催の「フランス語で俳句」というコンクールに優勝して、僕はフランス旅行を褒美にもらった。毎年十月の最初の週末の「白夜祭」をテーマにしたものだった。受賞した三人のうち、僕はパリとアルザスの旅だった。七日間。パリでは白夜祭に参加して、ネットなどでフランスの魅力を宣伝スルヨウニとのことだった。ホテルも飛行機もすべて予約済の招待。短くて残念だったが、その一日をやつとホテル・クルニユーにした。ソルボンヌ大学のすぐ横である。三年前まではいつもその前を通っていた。千八百七十二年、ランボーはそこで数日を通じたのだ。彼の小さな写真が窓ガラスに張ってあった。

ド・ゴール空港に着いたのは朝の四時。一時間ほど時間を

潰してタクシーでホテルまで直行する。当然ホテルはまだ閉まっている。えい、構うものかとベルを押すと眠そうな顔をして男が出てきた。別に気分を壊したふうはない。荷物を預けて外へでる。人通りはなくまだ寒い。久しぶりの界限を歩き回る。早朝のこんなパリも滅多に経験できない。パンテオン、サンジャック通り、ソルボンヌ大学、リュクサンブール公園の入り口、デイスコから若者たちが出てきて騒いでいる。やっと七時過ぎに空いたカフェを見つけ、熱いコーヒートク口ワッサンを口にする。飛行機の中で朝食はとったが、この朝飯はとくにうまい。

これは余談だが。午前中の予定はサンテ刑務所のまわりを散歩すること、途中にある島崎藤村の住んでいたアパルトマンを見ることだった。サンテ刑務所には興味があつた。アンリー・ルソーやアポリネールが入っていたのが千九百十一年、大杉栄が千九百二十三年、ジャン・ジュネが千九百四十五年ころ、僕は彼らと同じ時期にそこに入れて対面をさせたいという空想に捉われて小説を書くつもりだった。帰国後、同人誌海に「偽手紙」という題で発表した作品はまあまあの評判だった。

昼にホテルへ戻ると、さっきのボーイはいない。小さな綺麗なホテルで、受付の感じもいい。ランボーに会いたくてここを選んだという、いろいろ話してくれてこれからも用事があればメールをくれと喋りかけてくる。出来れば、彼が

泊まった六十二号室は空いているかと聞くと狭いけどいいか、ちよつと見てもいいよ、という。見る必要なんかあるわけない。空いていればそれが最高だ。

その部屋はダブルベッドがあるだけで空間はほとんどない。シャワーとトイレ。明るく清潔である。窓からは他の建物の窓や壁が見えるだけだが、ランボーは、くそつたれのパリと言いながらこの部屋は気に入っている。これもヴェルレーヌが世話をしてくれたホテルだ。やはり友人ドラエーにあてた長い手紙、夏の暑さに文句を言い、まわりの人間を揶揄し、少しはシャルルビルを懐かしんでいる。

「・・・今のところ、僕が仕事をするのは夜だ。真夜中から朝の五時まで。・・・現在は奥行きのない三メートル四方ばかりの中庭に面した美しい部屋に住んでいる。・・・その部屋で僕は夜つびで水ばかり飲んで・・・。」

この時期も充実した詩をいくつも書いている。彼の韻文詩の時代の最後に近い。「一番高い塔の歌」「飢餓の祭り」「五月の軍歌」など。渇き、飢え、夢想。この時期の詩に対する評論家たちは、ある甘美な憂鬱感を帯びた悲嘆の調べ、諦観したような倦怠感、陶酔の模様・・・などと評している。

あれが見つかつた

何が永遠

太陽と共に去つた

海のことさ

よく知られた「永遠」という詩だ。だが彼はこの時にはまだ海は見たことはない。

偶然に出会った友人の一人が当時のランボーについて語っている。

「彼の鷹揚な眼差しのうちにはかすかな気まずそうな様子と躊躇がたゆたっていた。それでもそんな波乱に満ちた日々にあつて、己自身も他人もどこか茶化しているような柔和な冷笑がそこにはきらめいていた。・・・」

友人の一人にMさんという女性がいる。彼女のランボーへの傾倒はすごい。一人でランボーの足跡を辿っている。ロッシユ村の情報を一度教えたことがあつた。彼女は即訪ねて行ったようだ。あの町のタクシーで案内してもらつたら、貴方の事を覚えていた、と教えてくれた。ホテル・クルニユーに泊まったことを話すと、私の二十六歳の誕生日に前後一週間そこに泊まつたわ、ということだつた。

「十三」その時期の終わり

可愛そうなヴェルレーヌは、離婚すると言われて反省し家へ帰るが、誘われるとまたランボーの下へ走る。優等生で尊敬してくれていた詩人仲間からも疎んじられる。何度もランボーと別れる決意を示すが、いつも挫折。そして馬鹿にされる。

その年の夏はランボーもいささか倦怠に捉われる。詩への意欲も薄れかけている。はつきりとした日付の入った詩に「若夫婦」というのがある。ある評論家に言わせると、この時期の描写には、もう言うべきことが彼にはない、詩作も稀になつていった。努力しても何にならう。彼に注目する人も少なくなつていった。雑誌も彼の詩を取り上げない。酩酊と睡眠に明け暮れる生活、いつまでも続くはずはない。倦怠に襲われながら、彼の胸の中は何かへ対する欲求ではち切れんばかりであつた。

結局二人は出奔する。マチルダと母親が追いかける。シャルビル、ブリュッセル、ロンドン、ドーバー、アントワープ、を放浪する。金がなくなるとヴェルレーヌは母親に懇願する。その繰り返しだ。

昨年の九月、彼がパリのヴェルレーヌのもとに現れて一年が経つた。あちこち彷徨いながらランボーはまた次第に元気になる。歡喜は炸裂する。

おお、季節よ 城よ

無辜の魂などこの世にあるのか

またブリュッセルでは

いやもう沢山、美しすぎる、黙つていよう

と唄う

パリからブリュッセルを越えてさらにブリュージュを通り越すとオーステンドの港だ。夕方遅く彼らは船に乗り込みロンドンを目指す。

ブリュージュは「霧と運河の町」あるいは「死都ブリュージュ」としてローデンバッハで知られている。ついでだが、彼はほとんどランボーと同じ歳なので当時は知られていなかっただろう。

オーステンドは当時は知らないが、今はカジノがあったり結構な観光地になっているらしい。僕はブリュージュに泊まるつもりだったから半日だけをそこで過ごした。街の中心では市が立っていた。画家アンソールの家は休みで閉まっていた。僕は海岸べりのレストランで海を見ながら食事をした。定番の舌ヒラメのムニエルと魚スープ。海は曇っていてぼんやりしていた。水平線は見えなかった。何とも心地よい午後だった。

はじめて海を見た若者で感激しないものはいない。そして海原に昇る雄大な太陽を。ましてや感受性豊かな我らが詩人ランボーは、眩惑され限らない希望に燃え上がる感動を覚えたに違いない。柔らかな曙光が次第に猛々しい太陽になって海上から昇る美しさを、一瞬たりとも眼を離さずに眺めていたに違いない。この時から無意識であっても、南の国々の太陽が己の宿命の究極地であることを予感していたのだ。

二人は一晚の海の旅を終えてロンドンに着く。世界の最先

端の都会、ロンドン。たまたま開催されていた、国際万博にて最先端の科学を眼にし、シエクスピアの芝居を観、イギリス人の未来への信頼、自信、あらゆる文化の活力に衝撃を覚え興奮した。カフェで一杯のコーヒースーエ今までとは違う。この時期にランボーが「共産党宣言」なども読んだのではないかという評論家もいる。二人が図書館へ通う姿を想像しても楽しい。

散文詩「イルミナシオン」の詩片もいくつか書かれた。また二年間、ランボーに翻弄され、破廉恥な家庭生活を自虐的に苦しみ、名誉も友人も捨ててしまったヴェルレーヌも刺激され再び書きはじめる。イギリスの現実離れた雰囲気浸されて、甘美な哀愁ともの憂い悔悟に満ちていると言われた詩片を残す。

だが喜びと感動の中の持続の中にあつて、意識しないまま、それを破壊して先へ進まねばならない宿命がランボーの性格にはあつた。

妻からの離婚と賠償金の請求に悩まされ怒り狂うヴェルレーヌ、そのくせ妻への未練は断ちきれない彼を置き去りにするランボー、諍い、仲直り、その繰り返し逃避行は続く。ロンドンにたむろする落伍者と肩を並べる状態にまでなった日々。

ヴェルレーヌの母親はそれでも彼をかばい送金する。またランボーの母親とマチルダの母が出会って、相手を誹謗し合うのも面白い。高尚な芸術への希求と泥沼の家庭問題の葛藤

が面白い。ランボーもまた母親に会って叱られ、しぶしぶとシャルルビルに連れ戻されたりする。

若夫婦、その親たち、それにランボーが加わった四つどもえの闘争の末、ヴェルレーヌが改心して家へ戻り、千八百七十二年は終わる。

だが千八百七十三年は再び平穏な顔をした地獄の使者の訪れで始まる。鬱病に陥りもう死期が来たと呟くヴェルレーヌを心配して、母がランボーを呼び寄せる。

再び地獄が始まる。離婚問題、脅迫、諍い、逃避、金欠、傷つけ合い、放浪。ド・ヴァア、アントワーブ、ブリュッセル、ヴィヨン、リエージュ、ロツシユへの帰還。男色の疑いで取り調べを受けたり、確かではないが、かつて市役所員だったヴェルレーヌがパリコンミューンのシンパだったと警察に睨まれる。その繰り返しで半年が過ぎてしまった。

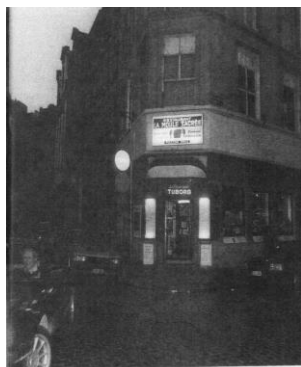
ついにその時が訪れる。決着をつけて出て行こうとするランボーとそれを止めようとしながらも、家庭を守ろうとする葛藤の板挟みに悩み泥酔したヴェルレーヌ。

七月十日の蒸し暑い午後のブリュッセル。美しいグラン・パレ「大広場」の裏通り、ヴィル・ド・ラ・クールトレ・ホテルで二発の銃声が響く。最初の弾丸はランボーの左手に命中したが、二発目は壁に当たった。

ランボーはサン・ジャン病院で弾丸摘出を受け、ヴェルレーヌは刑務所へ入る。

彼は自由の身になり一人になったが悔悟と苦い痛みで茫然

としていた。スキヤンダルが広まり、こんなバカげた出来事で名前を失墜させられるのか。もうパリには興味はない。十日後彼はロツシユ村へ戻る。そのヴォンク駅に降り立ったランボーは、安心したのか「ポールが、ポールが・・・」と泣きながら自責の念に駆られて涙を流していたらしい。



ヴェルレーヌがピストルでランボーを撃ったホテル

このヴォンク駅については今後は彼の出走、帰還においてその時々の意味のある起点である。それについてはまた別途書きたい。

ブリュッセルの中心に、前述のグラン・パレ「大広場」と呼ばれる広場がある。かなり広い。周りは十八、九世紀の綺麗な建物が囲んでいる。ユーゴーが世界で一番美しい広場だと、言ったらしい。昼も夜も美しい。その裏通りには、小僧の像があり、その辺りを曲がっていくとブラッスリー通

りの角の小さな三階建ての建物に出会う。もう随分前なので正確には覚えていないが、一階が煙草屋か小さなレストラン。それが二人の大きな転換期とその時期の終わりを迎えるホテルだ。ただホテルは廃業していた。広場も小便小僧もカフエもあたりは観光客で溢れているので、ランボーとヴェルレーヌの哀しい友情と愛憎、天国と地獄の終着駅をゆっくり味わうことはできなかった。しかし僕には懐かしさに溢れた雰囲気だけは確実に残った。ある時僕のフランス語のエレーヌ先生の御主人が君にあげると写真を撮って来てくれた。建物に張られたプラグの写真だけだったが。

続く



ランボーとヴェルレーヌが
はじめて出会った家
ヴェルレーヌの新婚の家